

## ルーマニア旅行記

昨年12月にルーマニアを訪れた。5年ぶりの再訪になる。私が前に訪れた時は、青年海外協力隊の隊員としてであった。

ルーマニアはヨーロッパ大陸の東端、黒海の西に位置する東欧の国である。年間降水量はおよそ600mm。豊かな黒土の広がる穀倉地帯では小麦、トウモロコシ、ヒマワリが大規模に栽培され、国の中央部に横たわるカルパチア山脈では果樹・牧畜が盛んである。国内総雇用の30%強を農家が占め、比較的農業環境の豊かな農業国といえる。

一方でルーマニアのGDPに占める農林水産分野の割合は10%を大きく割り込んでおり、就農人口の割に低い。これはルーマニアでは、自給を主体とする農家、もしくは余剰分のみを販売する半自給農家が全体の95%を占めていることに起因している。こういった小規模農家をまとめ上げ、組合を組織する手伝いをするのが、私の隊員時代の任務であった。

組合設立のためのセミナーにはいつも多くの農家が集まり、農家の関心も高いことが伺えたが、組合設立への動きは必ずしも積極的ではなかった。それは共産主義時代に農地を接収された彼らは、共同組合というものに、かつての集団農場経営を重ねていたためだった。

私は現地での活動の中で、一日一軒の農家の農作業を手伝いに行くことにした。私にとっては、現地の農業を学び、農家の生活の様子を知り、信頼関係を構築しながら、組合の説明もできる、地道ではあるが一石四鳥の活動であった。加えて私が楽しみにしていたのは、労働の報酬としていただく昼食であった。どの家庭の料理も自家製ワインも本当においしかった。

残念ながら私の在任中に組合設立までたどり着くことができなかったが、後任のための基盤作りや信頼関係の構築は達成されたと思う。

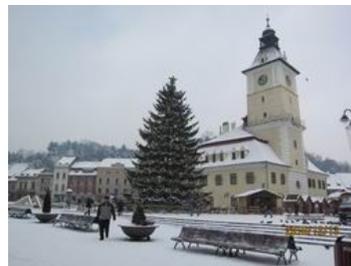
私がいた頃のルーマニアは「EU加盟」を目前に控え、国全体がある種の期待感に満ち溢れていた。そして2007年、ルーマニアはEU加盟という悲願を果たした。私の今回の再訪の楽しみはEU加盟後のルーマニアがどのように変わったのかを実感することであった。

首都ブカレストの変化には目を見張るほどであった。多くの高級車が走り、落書きだらけだったメトロが真っ白に生まれ変わり、若者がスマートフォンを触っている風景は、EU加盟後の栄華を反映しているようだった。その一方で、私が住んでいた村はまるで時間が止まっていたかのように、昔のままであった。懐かしい村の風景と変わってしまった街を比べ、政治体制変革の過渡期とはかくあるものなのだろうか、複雑な思いがした。

ルーマニア再訪のもう一つの楽しみがカウンターパートとの再会であった。彼は以前と変わらない笑顔で再会を喜んでくれた。彼の話では、私の帰国後、組合は設立したものの、実質的な活動ができていないとのことであった。EU加盟と共に日本からの援助もなくなり、組合活動自体、大幅な軌道修正を余儀なくされていた。それでも情熱を失わずに、活動を続けている彼と再会し、改めて彼と活動できたことを誇りに思った。彼の努力が実を結ぶことを心から願っている。

彼らと活動を共にすることで、友情を深めることができた一方、農家の組織化支援の難しさを感じた。そして限られた時間の中で、的確な成果を出すこと、またそのための道筋を明確化する重要性を感じた。

私はこの1月に国際耕種に入社し、2月にはJICA筑波の研修業務に携わることになっている。各国から選ばれてきた研修員に関わることに緊張もあるが、楽しみもある。ルーマニアの時と同様、新しい絆を筑波で作りたいと思う。  
(澤田)



冬のルーマニアは相変わらず、真っ白で美しかった。教会のモミの木は彩られ、クリスマスの準備が進んでいた。



カウンターパートと再会。雪の降る中、シナモン入りのホットワインを飲む。人懐っこい笑顔は以前と変わらない。